

神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ

(8回連載、第4回)

第四章 「肉の愛」から「神の愛」へ

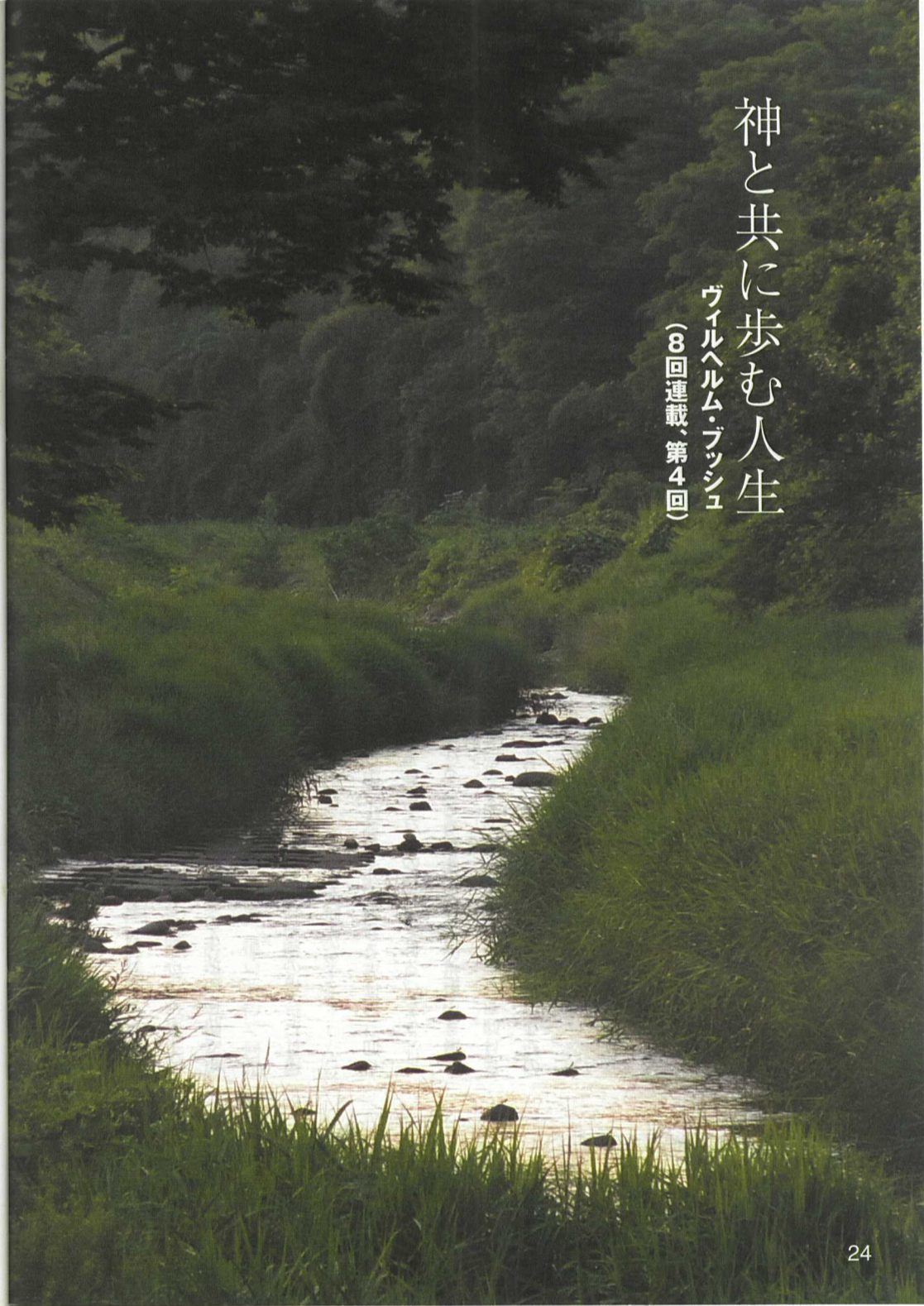
この章には別の題名をつけることもできます。それは「愛は、罪となりうるか」です。ここで取り上げるのは、現代の私たち皆に関係のある「性的な問題」です。この問題に関して、とても大切に厳しいことをお話ししたいと思います。

限らない苦悩

いまの世相から思われるのは、現代ほど人間が孤独感にさいなまれていた時代はかつてなかった、ということ。職場や町中で見かける緊密な人間関係も、表面的あるいは一時的なものであって、多くの人は「何でも相談できる友人など、自分にはない」と感じている、それが現実ではないでしょうか。ある十六歳の少年が私に「僕のそばには誰もいな

い」と言ったことがあります。「そんな馬鹿なことを。君にはお父さんがいるじゃないか」と言う私に、「ああ親父ね。いつも五時頃帰ってきて僕に文句を言つて、飯を食ったらすぐいなくなってしまうんだ」と彼。「お母さんは?」「母さんはすることがたくさんあり過ぎて、僕のことなんか構ってくれないよ」「君の仲間はどうなの?」「仲間なんかどうちみち、ただの仲間さ。僕には心を開いて話せる人なんか誰もいないんだ」。こんなやりとりが続きました。孤独感を訴えるのはこの十六歳の少年に限りません。たとえ夫がそばにいても死ぬほどの孤独に苦しんでいる妻は多いし、その逆のケースもあります。夫は妻が何を求めているのか知らないし、妻も夫が何を喜ぶのか分かっていません。これが多くの結婚生活と呼ばれているものの実態です。実に多くの人々が孤独の中にいます。

今日、哲学者が孤独について話をする人々は耳



を傾けます。孤独からの解放を求めている人が多い証拠です。そして孤独から脱出したいという渴望が、最も強い本能の一つである「性的本能」と結びつく時、多くの問題が生じます。十五歳の少年は、孤独から逃れたいばかりにガールフレンドを求めます。妻がいるのに孤独な夫は、孤独から解放されたいと願って秘書と不倫関係を持つようになります。大学で勉強する若い学生も心の中は非常に淋しいので、同じように孤独を感じている女子学生と親しい仲になります。このように、孤独から脱出したいという渴望は性的本能と非常に強く結びつきやすいのです。さらに現代では、人々が性に対して異常な関心を抱くように仕向ける悪らつなビジネスがはびこっています。

ある若い女性に胸を張って言います。「私たちは祖父母の時代とは全く違った道徳感、倫理観を持って生きているのよ」と。しかし私は、長年大都会で牧師をしていた経験上、このようなうわべだけの強

がりの裏に、限らない悩みが隠されていることを知っています。危険な関係にある若い男女、偽善的でうわべだけの夫婦、また崩壊に瀕している結婚生活など、多くの方々が悩みの中で苦しんでいるのです。

実は数年前、同じようなテーマで若者を対象に講演会を開いたことがあります。会場に入ったとたん、私は異様な光景に息を呑みました。煙草の煙がもうもうと立ち込め、アルコールのグラスが林立し、多くの若い男たちの膝の上には若い女たちが座っていました。

その中で私は語り始めました。「今の世の中、性に関する痛ましい話がいっぱいあります」。その瞬間、会場は急にシーンと静まり返ったのです。私の言葉を聞いた若者たちの心に、何かが強く響きました。表面的には快楽が支配しているように見えながら、性的な生活に大きな苦悩があることが明らかになりました。

いの苦悩はどこから来るのか

この苦悩は、私たちがもはや善悪の区別ができなくなっていることに端を発しています。ある人々はこう言います。「現代では、私たちは性に関して新しい見方をしているのだ」と。しかし、見方が新しからうと古からうと、罪が現実存在することに変わりはありません。私たちが罪を犯せば良心の呵責を感じます。それが現実です。そして、もはや善悪の区別がなくなつたところから悩みが始まるのです。つまり、婚前交渉は許されるのか、悪なのか。理解しあえない結婚生活では姦淫は必要悪なのか。同性愛は罪なのか。離婚は悪なのか。一体何が悪で、何が善なのか……。

映画や恋愛小説などでは、性は善悪を判断する対象外の事柄のように取り扱われます。果たしてそれでいいのでしょうか？ 私たちは善悪の基準をどこに

置けばいいのでしょうか？ 私は青年の頃、性の問題について、一体何が許され、何が許されないのか、散々悩みました。

この問題に正しい答えを出すためには、もう一つの疑問を提示する必要があります。それは善悪の基準を決めるのは一体誰なのか。何が善で何が悪か。正しい答えを出せるのは聖書か、それとも私自身の良心か、という疑問です。

これは大変重要な点です。生きている神がおられるなら、善悪を決めるのは神です。では、もしも神がおられないなら人は好き勝手なことをしてもいいのでしょうか。私たちはここにきて、神がおられるのか、おられないのか、という問題に再び直面します。神が実在するなら、この性的領域に於いても、厳然とした神の考えが必ずあるはずです。聖書には次のように書かれています。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。
(イザヤ 55:6)

聖書のどこにも「自分の好きな時に主を呼び求めよ」とは書いてありません。もし神がおられないなら、好き勝手にしてもよいでしょう。しかし、「神は厳然と生きて」おられます。ですから、何が善で、何が悪であるかは神が決められるのです。

主なる神は生きておられます。私がなぜ主が生きておられることを百パーセント確信できるかというと、主はイエス様を通してその存在を告げ、私たちにご自身を啓示されたからです。イエス様がこの地上に來られて以来、主なる神に対するどのような無関心も、また主を拒否する心も、すべて無知と悪意あるものになりました。主は確実に生きておられ、善悪の基準を持っておられます。もしあなたが、「私は異なった道徳観を持っているのだ」と言い張るな



ら、あなたは神の御前で自分の考えと人生について申し開きをしなければなりません。

善悪を決めるお方は神であると知った時、私たちは非常に大きな解放感を覚えることができます。聖書のみことばを通して、神は私たちにはつきり語っておられます。「そんなことまで聖書に書いてあるのか」と驚く方がいますが、聖書には「性の領域」に関しても善悪の基準が明示されています。従って、この領域について神は何と言っておられるのか、聖書を見る必要があります。

神は、何と言っておられるのか

主なる神は性を肯定しておられます。聖書は、神が天地とともに人間も創造し、男と女に創造した、とはつきりと語っています。神はそれぞれの性をも創られたのです。これは触れてはいけない領域では

ありません。だから私は、このことについて公然と話したいと思います。神は私を男として造られ、ここにおられる男の方々も造られたのです。そして、女性は神によって女として造られました。ですから、女性が男のようになろうとしたり、男性が女のようになろうとすることは病的であるとか言えません。神が人を男性あるいは女性として造られたのであって、人間の思いで性を代わるなどということはあり得ないのです。男性であるか女性であるかは、神の創造のうちに厳然と定められています。

しかし、現代の人間は墮落した被造物になり、この世は初めに神が計画されたものとは全く異なったものになってしまいました。中でもこの重要かつデリケートな性の領域が危険にさらされています。それゆえ神は、この領域をしっかりと守ろうとされました。

神は、婚姻を通して性を守られる

主なる神は、性を肯定し、婚姻制度を通してそれを守っておられます。結婚は社会的な契約ではなくて、神みずから造られたものです。

あるアメリカ人の心理学者は、キリスト者ではないのですが、次のように書き記しています。

「性の問題全体について、聖書ほどはっきりと書かれたものではありません。聖書には、『神はこのように人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。』(創世記 1・27)

とあります。私は、キリスト者ではありませんが、心理学者として婚姻制度が正当であると言明します」

神が定められた「結婚」とは、あるテレビタレントのように何度もやり直す手軽な結婚ではなくて、たった一度の誠実な結婚のことです。神は、愛と誠意をつらぬいた婚姻制度を創造されたのです。

ここで結婚について少しお話ししたいと思います。

妻たちは、夫のためにおいしい食事を作ったり、ボタンを縫い付けたりしていさえすれば、それが良い妻だと思っただけではありませんか。また、夫たちは家計を維持するために妻に必要なお金を渡してさえいれば、それ以上関心を持たなくても十分だ、と思っただけではないでしょうか。結婚生活は、「神のみこころに従って孤独から解放されるものであるべき」なのです。すでに結婚しておられる皆さんの結婚生活は、果たしてそのようなものであるでしょうか。もしかすると、この機会に二人で話し合う必要があるかもしれません。「私たちの結婚生活は、孤独からの解放であるべきなのに、私たちはどこに向かっていたのだろう」と。

主なる神は「人が、ひとりであるのは良くない」(創世記 2・18)と思われ、助け手を造ってくださいました。これがまさしく孤独からの解放だったのです。

ここで一つ思い出話をさせてください。私がまだ

少年だった頃、姉と二人で初めて親戚の結婚式に連れて行ってもらいました。初めて見る結婚式は、すべてが興味深かったのを覚えています。教会までは馬車に乗って行き、式の後にはホテルで盛大な食事がありました。姉と私はデザートのアイスクリュームを楽しみに待っていました。退屈なあいさつが続きました。しかし、あるおじさんのあいさつを今でもよく覚えています。その人は、皆を笑わせようとして次のように話し始めました。「ご参列の皆様。天国には結婚したことを一秒たりとも後悔したくない夫婦のために、二つの椅子が用意されているそうです。しかし、今日までその椅子には誰も座ったことがないそうです」

この瞬間、彼の挨拶は中断されました。私の父が母のところに駆け寄って、「その椅子は私たちのものだ」と叫んだのです。私は幼な過ぎてその深い意

味はつかめませんでした。けれども、私の心の中にはこのように温かい家庭で育った喜びがあふれました。あなたの結婚生活もそのように温かいものになっていますか。主なる神は結婚をそのように想定しておられるのです。

私が結婚した時、一人の同僚が次のようなスピーチをしてくれました。「神は、いつもそばにいてくれる助け手を創造されました。彼の上に立って支配しようとする女主人ではなく、足元に置かれている女奴隷でもなく、またどうでもいい存在として脇に置かれている者でもなく、いつもそばにいる助け手を」と。

銀婚式の時、母を見つめながら「この二十五年間で、私はますます君を愛するようになったよ」と言った父の言葉に、私は深い感動を覚えたものでした。二十五年もたてば結婚生活は冷たくなっていることが多いのではないのでしょうか。しかし、そんな時、

配偶者に次のように言うべきではないでしょうか。
「もう一度最初からやり直してみよう」と。その通りです。それは、可能なのです。

若者の中には、結婚などまだ全く考えられないという人が多くいます。そのような人々は、「自分がしたいようにすればいい」のでしょうか。

神は、清い青春を望んでおられる

その昔、イサクという若者がいました。父親は彼の妻を見つけようと思いました。イサクもまた、野に出て行って妻を与えてくださるよう祈りました。彼は妻を与えてくださるのは神ご自身であると確信していたからです。そして彼は、まだ全く知らない妻に対して、誠実であり続けたのです。

自分は結婚などできない、と思い込んでいる若い

男性の皆さん。どうか確信を持ってください。神がきつと最善の時にふさわしい相手を与えてくださるというのを。まだ見ぬ相手の女性に対して誠実であり続けるなら、神はどんなに喜んであなたを祝福してくださることでしょう。女性の皆さんも同じです。神が与えてくださる未知の相手に対して、終始一貫、誠実であり続けるべきなのです。これが聖書の考えです。主なる神は清い青春を望んでおられます。

かつて私は、ある精神科医から次のようなことを聞いたことがあります。「女性の本心は、一度しか開かないのです。ですから私は、女性は基本的に一度しか本心から愛することができないと確信しています。たとえ七回結婚したとしても、結局は最初の人を愛し続けるのです」と。そこで、私は答えました。「興味深いことです。あなたは心理学を通して、神のことはと同じ真理にたどりつかれたのですね」。

以上のことからはっきり言えることは、婚前交渉、

同性愛、姦淫、離婚などはすべて罪であって、聖なる神の裁きの前に立つこととなる、ということですが、私は、若い時に神のみこころを知り、神だけが正しいお方であることを知りました。そしてそのことが、私の人生にとって大きな助けとなったのです。

苦しみはどのように克服されるのか

聖書には、次のような感動的な場面が記されています。

生ける神の御子であるイエス様が宮で民衆に教えとおられる時、律法学者とパリサイ人が、一人の女を連れて来て、言いました。

「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにする

ように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。けれども、彼らが問い続けてやめなかつたので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。」(ヨハネ 8:4-9)

ここで、皆さんにお尋ねします。「あなたがたの場にいたら、自分は罪がないと思って、この女に最初の石を投げつけることができますか」。誰一人、できないのではないのでしょうか。そうです。私たちは皆、罪人なのです。

この人たちは大きな間違いをしました。良心の呵責にさいなまれてその場を去ったのですが、むしろ神に次のように言うべきではなかったのでしょうか。「主イエス様、私はこの女の横に自分自身の身を置きます。あなたは彼女を地獄に落とされませんでした。どうか私たちをも助けてください」と。

今の時代、性的な悩みについて助けてくださる方はイエス様以外にありません。私自身イエス様の助けによって生きてきた者としてそう言うのです。私がイエス様についてお話をする時、単なる理屈を並べているのではありません。イエス様は、私の人生にまことのいのちを与えてくださいました。牧師とは言っても中性的な存在ではなくて、一人の男性です。私もあなたがたと同様に救い主を必要としているのです。そして、イエス様がどのような救い主であるのかを、二つの面において体験的に知ることができました。



イエス様は、 罪の負い目を赦されるお方

牧師も、祭司も、あなたの罪を赦すことはできません。あなたが汚れた思いを一つでも抱けば、それは神に対する取り返しのない負い目、罪となります。そして、神に対するすべての罪を背負って主の前に出、主のさばきに会い、永遠の滅びに至ります。だから、その前にイエス様を見出し、罪を告白し、赦していただかなければなりません。イエス様ただお一人だけが、私たちの神に対する負い目、罪を赦すことができるお方です。イエス様の十字架の前に自分のたましいを置いて、次のように言うてみてください。「私の若い日の罪をすべて御前に差し出します。私と暗闇との関係を、包み隠すことなくすべてあなたに告白します」と。そして十字架を見上げ、次のように言うてください。「あなたのとう

とい血潮は私のために流されました。私はそのことを信じ、受け入れました。それによって、私のすべての過ちも清算されました。キリストが私のために死んでくださったゆえに」と。

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。
(1ヨハネ 1:7)

これこそ、私たちを解放してくださるみことです。

私は十七歳の時に軍隊に入り、泥沼で溺れるような極限の日々を強制されました。それは荒れ果てた汚れた生活でした。そのようなある日、突然、次の思いに圧倒されました。「私の若い日々の汚れを、一体誰が取り除いてくれるのだろうか」。そしてその時突然、「イエス様が十字架で私の過去を清算し、私の罪を赦してください」という思いが、私を貫

いたのです。私がイエス様に立ち返ったのは、まさにその時でした。もはや、イエス様なしに生きることは、不可能でした。

デュッセルドルフで開かれた大きな集会で、私はイエス様が十字架にかかって私たちの代わりに罪の赦しを成し遂げて下さったことを話しました。集会が終わり、参加者が外に出始めた時、一人の背の高い紳士が、興奮した様子で問いかけてきました。「罪の赦しがあるとおっしゃいましたが、それは本当ですか」。私は喜んで答えました。「その通りです。私はそのおかげで生きていますのです。ですから神に感謝しています」と。彼は続けました。「私は精神科医です。多くの人々が心の病をかかえて私の所に来ます。彼らにはコンプレックスがあるのですが、一体何が原因で悩んでいるのか分かりません。多くの場合彼らは、覚えていないか、あるいは思い出したくない昔の罪の呵責を

心の底に秘めているのです。私はじつくりと時間をかけて、昔あったことを無意識から意識の中へと引き出そうと試みます。しかし、そこで私の力は尽きてしまうのです。私は、昔の罪を光の中へ引き出すことはできません。それは嘘であつたり、争いごとであつたり、淫らなことであつたりします。しかし、絶望的なのは、私はそれらの罪をどうすることもできない、ということなのです。だからブッシュさん、罪の呵責を取り除くことのできる方が本当におられるのですか。それは本物ですか」これに対して私は喜んで「はい、おられます。それは私たちを造られた神ご自身です。私はその神に感謝します」と、証しします。聖書に記されている「イエス様は、私たちの罪を赦すことがおできになる」という事実、これこそ、もっと多くの人々が知るべき、神の偉大な救済なのです。

イエス様は、悪い関係を絶たせてくださるお方

ある時、若く美しい秘書の方に言ったことがあります。「あなたが上司との恐ろしい関係を絶たなければ、あなたの未来は地獄ですよ。彼と彼の家族の幸せを奪わないでください」。彼女は顔を曇らせながら次のように答えました。「私は彼を愛しているのです。だからやめられないのです」。私は言いました。「しかし、彼には妻子があります。あなたはとても残酷なことをしています」。少し考えた後に、彼女は繰り返し返しました。「私はどうしても止められません」と。この時、私は彼女が自分ではどうしても絶つことのできない関係に苦しみ抜いているのを感じました。そこで私は答えました。「罪の縄目を断ち切ることは、私たちにできません。しかし聖書はこう言っていま

す。「神の御子イエス様によって罪から解放された人は、本当に自由なのです」と。イエス様を呼び求めてください。そうすればこのような暗闇の関係も断ち切ることができます」

私の好きな歌の中に次のような歌詞があります。「イエス様が来られたので、私はすべての束縛から解放されます。死の拘束からも断ち切られます。神の御子が私たちを解放してください。私の汚れた罪から、主の栄光のもとへと、すべての束縛から私を解放してください」

このように、私たちの性の悩みや罪の束縛を見る時、すべての人が救い主を必要としていることが分かります。イエス様が、すばらしい現実的な解決を与えてくださいます。この救い主なくしては、あなたの人生は惨めなものです。

全世界は、「神の愛」を求めている

多くの女性方から、次のように言われます。「私は四十を過ぎているのに、結婚する相手がいないのです。私は一体どうなるのか不安です」と。

私は熱心な平和主義者ですが、実はこういう悩みを持つ女性の発言を通して、そのようになったのです。ドイツでは第二次世界大戦で五百万人以上の若い男性が戦死しました。つまり、それは五百万人以上の女性が結婚する道を絶たれたことを意味します。この五百万人以上の女性の悩みだけを見ても、戦争に反対する立派な理由になります。

彼女たちが将来を共にし、二人で幸せになったであろう男性たちは、不幸なことに戦場で亡くなったのです。とりわけ、将来を誓い合った恋人の死をその耳で聞かなければならなかった気の毒な女性の心情は、いかばかりであったことでしょう。

死を迎えたのだと思っていたのですが、その部屋に入って驚きました。そこにはたくさんさんのやもめが集まっていて、共に泣き、タビタが作ってくれた上着や下着の数々をベテロに見せてくれたのです。おそらくタビタは、多くの孤独な人々を訪ねては話をし、足りないものを補い、面倒を見ていたのでしょう。町の子供たちも彼女になついていたことでしょう。それらの人々にとっては、タビタが訪ねてくれた時間が、生活の中でかけがえのない喜びの一時だったことでしょう。

共通するものの全く無い冷え切った結婚生活に比べて、タビタの一生は、果たして、貧しく、惨めなものだったでしょうか。いいえ、それは皆に親しまれ、豊かで充実した人生だったのです。

ドイツ語には愛を現す単語はたった一つしかありませんが、ギリシャ語には二つあります。新約聖書はそのギリシャ語で書かれています。この章で使っ

そして、絶対数が不足した状況では、どうしても不倫関係が増えてきます。しかし、このような関係にある女性に対して、私は心からお願ひしたいのです。「どうか、あなた方が失ったもののために、人から盗むという罪だけは犯さないでください。どうか、他人の結婚生活を壊さないでください」と。戦後のドイツ国民は大きな試練と困難に直面しているのです。お気の毒な女性の皆さんから「それでは私たちはどうなるの。どうしてくれるの」と詰問されたら、私は涙を抑えてこう答えます。「あなた方がそのように導かれたのなら、それに従ってください。結婚できないからといって、必ずしも貧しいわけはありません」

聖書は、タビタという未婚の女性について語っています。彼女はヨッパという町に住んでいました。彼女が死んだ時、弟子たちに呼ばれてベテロがやって来ました。ペテロはてっきり老女が孤独のうちに

てきた「愛」という単語は、ギリシャ語では「エロス」といいます。どちらかというと性的な意味が濃い言葉です。ギリシャ語で愛を現す二つ目の言葉は「アガペ」といい、「神の愛」を表します。つまり、「肉の愛」と「神の愛、霊の愛」です。

結婚しない女性は、与えられている道に従って人生をこの「アガペ」、神の愛で満たしていただければと思います。今のこの世は、そのような「神の愛（アガペ）」に飢えており、それを必要としているのです。

さて、これまで私が語ってきたことをまとめますと、善悪を決定するのは神ご自身であり、神が要求されるのは清い青春期であり、誠実な結婚生活を送ることです。そして結婚に導かれない場合には、その独身の道を肯定することです。

また私が述べてきた現代の性の問題は、そのごく一部にしか過ぎませんが、性の問題のすべての解決

策は「肉の愛」を離れ、主がくださった「神の愛、霊の愛」に身を置くことにあります。主なる神は聖書を通してこのことを繰り返し説き、また、イエス様や多くの信徒たちの行為を通してその模範を示されました。私たちがこの問題に苦しみ時、そこからの解放は、主から出る「聖い愛、神の愛、霊の愛」によって初めて与えられるのです。

私たちが受ける権利のない愛

最後にもう一度、イエス様の話をしたいと思います。

この章の主題は「真の愛」ですが、私たちが全く期待できない愛、愛されるはずがない愛、受ける権利の全くない愛を、限りなく降り注ぎ、永遠に愛してくださいるお方が存在することを心に銘記しなければなりません。それこそ、イエス・キリストが無償

で私たちに与えてくださる「神の愛」なのです。

私たちは罪人であり、救い主を必要としています。私の個人的な証しをさせてください。ナチスの第三帝国の時代、私は信仰のゆえに投獄されました。刑務所所属の牧師によると、私の出獄の見込みは非常に乏しいものでした。私は狭い独房の中に閉じ込められて、寒さに凍えていました。そこには、かすかな光が射し込む裂け目がたった一つだけありました。むごい寒さの中で、妻や子供たち、かつて教会に集っていた若者たちのことを思い、私の心は痛みました。希望はなく、夜になるとたまらない絶望感に襲われました。あなたも人生のどこかで、同じような真の絶望を体験されたことが、きっとあることと思います。まさにその時です。主イエス様が、私の独房に入ってきてくれました。主は生きておられます。カギのかかった扉も通ることがおできになります。主は入ってきて来られ、十字架で罪人の私のために死んでくださっ

たそのお姿を私に啓示してくださったのです。そして、私の耳元でささやかれました。

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。
(ヨハネ 10・11)

この時、イエス様の手から「神の愛」が一気に私の上に流れ下り、私の心は圧倒されるばかりでした。そして私は、この自分のような者には受ける権利がなく、受けるには怖れ多い愛がある、と気づいたのです。その愛は、私たちにただ一方的に与えられるものであり、あなたにも提供されているものなのです。どうかその愛の流れを、そのままやり過ごさないでください。その愛はあなたの心の中にも流れ込みたい、と願っているのです。

